

Ⅲ 授業研究会

群馬県高等学校教育研究会音楽部会「平成30年度第1回授業研究会」

日 時 平成30年 6月22日(金)
会 場 群馬県立沼田女子高等学校
教科・科目 芸術科・音楽I
題 材 名 イタリア歌曲の特性や旋律の美しさを感じ取って、
歌唱表現を工夫しよう
指 導 学 級 普通科英数コース 1年1組
授 業 者 斎藤 真里奈 教諭



1 開会行事

(1) 挨拶

①清水 郁代 先生(群馬県高等学校教育研究会音楽部会長)

今年度第1回の授業研究会、授業者の斎藤先生はじめ沼田女子高校中曽根校長、職員の皆様には大変お世話になり感謝している。沼田への道中、梅雨らしくない気候、青い空・白い雲・緑の木々などを絵画的に感じながらやって来た。本日の歌唱の授業を参観できることを非常に楽しみにしている。授業研究会に参加された先生方それぞれが、研究協議まで含めて勉強になったという実感をもつ過程を大切にしてほしい。

②中曽根 径子 先生(群馬県立沼田女子高等学校校長)

本校は、創立98年目を迎える利根・沼田地域の女子教育の伝統校である。本年度、本校が目指しているのは、「高い志を持たせ、人間力を育てる」ということである。普通科の中で、英数コースは1クラス、普通コース3クラスであり、本日は難関大学志望の英数コースを参観して頂く。非常におとなしい生徒が多いが、斎藤教諭にはその生徒たちから積極性を引き出し、表現力を高める指導につなげてもらいたい。多くの先生方から本校の生徒の実態をご覧になってのご助言を頂きたい。

③島田 聡 先生(群馬県教育委員会高校教育課指導主事)

本日の研究授業では歌唱の題材の中でも独唱を扱うということで、音楽の学習として「王道」と言えるだろう。普段は教師の視点に立って授業を考えることが多いと思うが、独唱表現に向けての生徒一人ひとりの思考・判断に寄り添う形で授業を拝見し、実り多い時間として頂きたい。

また、3月に告示された次期学習指導要領については、これまで以上に「思考力・判断力・表現力」の育成の大切さが記述されている。特に「思考力・判断力・表現力」を育成するためには、大きく3つの過程があると述べられており、その1つに、「問題を見出し、解決の方向性を決定し、解決方法を探して計画を立て、結果を予測しながら実行し、振り返って次の問題発見・解決に繋げていく」過程と示されている。

本日の研究授業では、「Caro mio ben」を歌唱表現するに当たり、問題を探る生徒の姿が見られるのではないかと考える。研究授業の後の授業研究においても、活発に協議頂き、自校での教育活動に生かして頂きたい。

(2) 授業説明(斎藤教諭)

今回は見開きで2つの学習指導案を提示した。左側が授業研究系の先生方に助言をもらって作成した学習指導案、右側が、島田先生に来年度以降の授業計画も含めて加筆・修正して頂いた学習指導案である。それらを見比べて頂くと、授業の内容や課題がさらに分かりやすくなると思われるため、先生方の今後の参考として頂きたい。

本題材で扱う「Caro mio ben」の歌詞の内容は、まだ高校生にとっては理解することが難しいかもしれないが、興味をもてるものであると考える。楽曲の構成も分かりやすいため、難しさと楽しさを両立味わいながら歌唱表現できるように指導していきたい。

本日参観して頂く英数コース30名のクラスは、難関大学を目指していることもあり、学習意識が高い。授業態度はまじめであるが、その分生徒それぞれの積極性を引き出せるように、アプローチを工夫していきたい。

1学期は歌唱の授業を行っており、日本語の歌詞の楽曲に応じた発声法などを指導した。それを基にして、外国語の歌詞の楽曲に触れた生徒が、どのようなところで学習の深まりを感じているのかを見て頂きたい。特に本時では、歌詞の内容と旋律の動きを歌唱表現につなげ、生徒の学びがより活発に、そして深まるように指導をしていきたい。

(3) 授業研究係より

研究授業を観る「研究協議の視点」として、告示された次期学習指導要領を踏まえて次の4つを提案する。「見方・考え方」と「資質・能力の3つの柱」については参考資料にも目を通してほしい。研究授業後の授業研究では、各班で1～2つの視点を選んで協議を行ってほしい。

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">1. 課題の質やレベルは、本時の目標を達成するために適切であったか2. 本時の展開は、主体的・対話的で深い学びになっていたか3. 生徒は、音楽の「見方・考え方」を働かせていたか4. 評価の計画は、「資質・能力の3つの柱」と関連していたか |
|---|

2 研究授業 指導案参照



3 授業研究

(1) 授業者より趣旨説明等（斎藤教諭）

歌詞の内容と旋律の動きを歌唱表現につなげるという目標で授業を行った。生徒は本当によく歌ってくれ、発問の意図も汲んで取り組んでいた。授業の最初に歌った時よりも最後に歌った時の方が、生徒それぞれの中できちんと意図をもった表現ができていたと感じた。

本時の展開の最後の場面では、いくつかのペアの発表を行う予定であったが、活動の様子を見て今はやらない方がよいと思った。その分、ペアでの意見の共有ができていた。しかし、表現を工夫する意図を全体で確認せず、生徒がどこまで歌詞の内容と旋律の動きとの関連性をもとに強弱をつけられていたのかを見取ることができなかつたため、今後の課題としたい。



(斎藤教諭が生徒に示した「Caro mio ben」の最初の旋律)

(2) 研究協議① (班別協議)

(3) 研究協議② (全体協議)

1班：黒岩 (高崎)、五十嵐 (長野原・孀恋)、須田 (吉井)、秋元 (渋川青翠)

研究協議の視点：本時の展開は、主体的・対話的で深い学びになっていたか

- ・各ペアでの話し合いがしっかり行われていた。
- ・歌詞の内容と旋律の動きの関わりに着目して、お互いが意見を出し合いながら考えていた。
- ・ペアで工夫した歌唱表現を、クラス全体で共有する時間があるとより学びが深まった。
- ・ただ発声するのではなく、「喜怒哀楽」の表現で発声することでその後の歌唱表現につながっていてよかった。
- ・旋律の動きとその特徴を捉えさせるために、他の曲 (教員が作曲したもの) を比較させたのが分かりやすかった。
- ・ペアで考えた後、全員で歌う際に「表現は自由」という声掛けを行うと一人ひとりがより自由に伸び伸び歌えるかもしれない。
- ・本時の目標に合った導入が行われていた。
- ・話し合うための楽典的な知識が身に付いていた。
- ・歌唱表現をペアで考える際に、旋律重視、歌詞重視で分けて考えていたペアがあったので、違うペア同士での意見の共有があるとより深い表現が考えられた。
- ・歌う時に譜面台を使うと、歌う生徒は下を向かず、他の生徒はワークシートを見ることができるのでよいかもしれない。
- ・2人で机を1つ使うことによって、話しやすい雰囲気が生まれており、教員も間に入りやすく机間巡視がしっかり行われていた。
- ・比較するもう一つの旋律を教員自身でつくられていたことがよかった。
- ・旋律の動きを指でなぞったときに、リズムによってなぞり方が変化してしまっていたので、リズムをなくして音程だけに着目させると分かりやすかった。
- ・ペアごとの発表や振り返りの場があると、学びが深まった。

2班：引田 (市立太田)、車崎 (県立伊勢崎)、藤嶋 (関学附)、川上 (玉村)

研究協議の視点：本時の展開は、主体的・対話的で深い学びになっていたか

- ・女子高で声がキレイ、発音を大切にされていた。
- ・旋律を手で示していくことで、声の高さも分かり、主体的な学びとなっていた。
- ・歌唱の発表の際には誰に歌うかということが大切なため、お互いに向き合って歌ってもよい。
- ・発声練習が丁寧で、明るい雰囲気が作れていてよかったので、曲に生かさればなおよい。
- ・ペアでの会話による深まりが感じられた。
- ・発声練習が全員でしっかりできていて、女子高だから有効であると感じた。「喜怒哀楽」などの面白いアイデアだった。

- ・楽譜が書かれているワークシートは温かみがあり、有効だった。特に手書きであったために、生徒と近い関係が築けていた。
- ・最後の発表で楽譜を見るために下を向いている生徒がいたのが残念だった。
- ・2つのパターンの強弱を考えるという発問が、逆のものを考えるのか、全く別のものなのか曖昧だった。
- ・2～3人に机が一つという座席の配置が面白かった。
- ・先生の声の出し方に工夫があった。
- ・ペアで自然と歌って確かめ合える雰囲気がよかった。
- ・最後に付箋を使って助言をするのは、後で残るのでよいと思うが、歌った生徒の待っている時間がもったいなかった。助言する生徒は、歌う生徒の書き込んだ楽譜を見て助言できるとよい。
- ・旋律と歌詞の関連付けとして、「歌いやすい」「ふさわしい」などいろいろと発問が変わってしまったので、明確に伝えられたらよい。
- ・生徒は意思をもって歌うことができている、1時間の授業で成果が見られた。

3班：兒玉（高崎女子）、富岡（安中総合）、橋詰（太田女子）、勝山（万場）

研究協議の視点：課題の質やレベルは、本時の目標を達成するために適切であったか

- ・最初の発声練習を見て「合唱が強い学校だったな」ということを思い出すくらいとても上手だと感じた。
- ・2人1組での活動だったのはなぜなのか。
→（斎藤教諭）最初は4人位でよいと思っていたが、「独唱」ということを考えると、2人組がよいと感じた。
- ・歌うのが好きな子が多そうだと感じた。
- ・発声の「喜怒哀楽」が面白く、表情もついていた。この活動が歌唱表現につながっていた。
- ・「歌詞の内容」、「感情」、「旋律の音のつながり方」が目標のキーワードであったが、やや旋律優位だった。
- ・歌詞の内容にも、もう少し着目できればよかった。
- ・生徒が積極的だったが、「！」などのマークをどうするかという意見等も拾ってあげてもよかった。
- ・全体的には適切な手立てや質問ができていた。
- ・全体的に整理され、計算して絞られた内容だった。自然な雰囲気の中で、前時のポイント等に触れられていた。
- ・机間巡視をしながら意見を拾ってあげてもよかったが、時間的に難しい部分もあると感じた。
- ・最初から最後まで2人組で活動していたので、1人で考える場面がなかった。
- ・意見の共有と練習を兼ねて、プリントを回収して似たような意見をまとめるのはどうか。
- ・教科書を見て、答えを知りたいと思った。最終的に、教科書とのズレをどうするか。
- ・「一般的にはこうだ」という正解を知りたい生徒もいたし、指導者としては教えてあげたい。
- ・本時で取り上げた部分の先のフレーズまで含めて工夫を考えた方がよかった。
- ・もし音楽理論と関わらせるのであれば、pとfの回数を数えて比較するという方法も考えられる。
- ・グループ内で1人ひとり分かれて発表していたが、グループごとに聴き合い、グループでの音楽表現の差を感じ取ってもよかった。
- ・部屋をもっと広く使った方がよい。
- ・グループ数を減らし、1グループの人数を増やしてもよい。

4班：東（県立前橋）、角田（榛名）、塚田（太田工業）、伴野（太田東）

研究協議の視点：課題の質やレベルは、本時の目標を達成するために適切であったか

本時の展開は、主体的・対話的で深い学びになっていたか

- ・自作の旋律は効果的であり、生徒の発見につながった。旋律の特徴を感じさせやすかった。
- ・旋律の特徴から強弱を考えたのか、歌詞の内容から強弱を考えたのか、せっかく付箋もあるので根拠を書き記すとさらによいと感じた。
- ・後半の学習になるにつれ、生徒の歌唱がよくなっていった。生徒は得るものが大きい1時間だった。
- ・個々での表現の工夫を深める時間を設定してもよい。
- ・発声練習のテンションが高くてよかったため、これがもっと歌唱表現に生かされるとよいと感じた。
- ・授業研究会だからか、表現が出し切れていなかった。
- ・導入で旋律を比較させたのはよかった。
- ・生徒は、思考はとてもよくできていたが、表現があまりよくなった。思考を表現につなげるのは難しい。
- ・モデルのペアを前に出して発表をさせて、その例について取り挙げたり、その逆パターンの強弱を試して、どう感じるかを共有したりする方法も考えられる。
- ・この曲はハーモニーも特徴的であるため、取り扱っても面白い。
- ・先生方が最後に歌った時の生徒の反応がよかった。「これが音楽！！」だと感じた。
- ・先生の範唱や代表ペアの歌唱をマネするところから、自分の表現を模索できるようにするとよい。
- ・感情の変化を強弱で表すのは考えやすい。
- ・旋律についての導入が素晴らしいので、上行、下行、順次、跳躍と絡めて表現活動ができるとさらによい。
- ・ペアでの確認がよかったが、感情が音として伝わっているか、指摘し合えるとよい。

5班：野口（大間々）、戸松（吉井）、住谷（前橋商業）、木部（太田フレックス）、井上（藤岡中央）

研究協議の視点：課題の質やレベルは、本時の目標を達成するために適切であったか

本時の展開は、主体的・対話的で深い学びになっていたか

生徒は、音楽の「見方・考え方」を働かせていたか

- ・歌う時の表情のことで指示がなかった。
- ・楽典的な要素が多かった。
- ・表情も技術的な指導が必要である。表情、感情も含めて本時の学習の前に指導しておくとういと感じた。
- ・教科書の楽譜は、最初は見せているのか。
→（斎藤教諭）初めは見せているが、正解に近付いてしまうためワークシートにした。
- ・伴奏に表現がついていたので、それに合わせて歌っている感じがした。多数派に合わせる形になってしまったので、無機質に伴奏するというのも行ってもよいと感じた。
- ・「0' Sole mio」と「Caro mio ben」をセットで指導計画に組み込まれているが、指導する側の感覚で作っているように思う。
- ・伴奏に合わせるのではなく、アカペラでもよい。
- ・クラス全体の表現ではなく、ペアでの表現を追求することで、個の表現の深まりにつながる。
- ・フェルマータの表現方法がペアによって異なり、歌唱しにくそうであった。
- ・本時で取り上げた部分でとめるのではなく、次のフレーズまで含めた方がよかった。
- ・歌詞の内容または旋律の動きに合わせた表現は達成できていたが、感情を表現する場面がほしかった。
- ・最初と最後の歌唱に変化があった。
- ・付箋を使い、2人で評価をした場面で、深い学びへとつながっていた。
- ・今までの学習の振り返りの活動を取り入れた方が、幅広い見方・考え方につながったのではないかと感じた。今日の表現だけでは判断がつかない。

4 指導・助言等

(1) 島田 聡 先生（群馬県教育委員会高校教育課指導主事）

「喜怒哀楽」と関わらせた発声練習により、授業の導入から生徒が自然に笑顔になっていた。その後も、斎藤先生の声掛けに生徒は笑顔で反応していて、温かい雰囲気は授業の最後まで続いており、このような人間関係が授業においては重要だと感じた。また、音楽室に来ると笑顔になれるということが、精神面だけでなく技能面にもつながっており、笑顔で歌うことで、歌唱するために必要な表情筋を生徒は無意識に覚えていたと考える。しかし、生徒が無意識であるからこそ、生徒同士で向かい合って発声した時、指導者が「よい笑顔で歌えている、これが発声の基本だ」などと価値付けし、意識化する必要もある。「喜怒哀楽」を表現する発声練習はとても効果的で、例えば「fで悲しみを表現」というのが、楽曲の歌詞の「Cessa crudel」につながると感じた。

本時の展開では、斎藤教諭が生徒に示した本来の旋律とは異なる「Caro mio ben」の旋律の味わいを手掛かりにして、本来の旋律の音の動きと歌詞の感情とを関わらせる学習から始まった。そのために、手の動きで旋律の音の動きを表現するように指導していたが、楽譜から読み取ることに比べて、より音の動きが可視化され、実感的に理解しやすい手立てであったと感じた。二つの旋律の働きの違いをより明確に理解させるためには、例えば、ペアで同時にそれぞれの旋律を歌い合っ手て手の動きを比較していくことで、歌詞の内容に対する旋律の動きの違いを感じ取れるのではないだろうか。

二つの旋律を比較した後、斎藤教諭が生徒に示した旋律について「Caro mio benの感じがいない」と生徒とともに確認をしたことが、生徒が本時の学習課題を確かにもつことにつながった。学習指導案では、その部分が発問として囲みで示されており、本時の目標がここに集約されていると考える。この発問は、学習指導案に示されている目標よりも、生徒の実態に即して、旋律の動きと歌詞が表す感情との関連を学習の視点として分かりやすく表している。このように、生徒とともに学習課題を確認し、それが端的な言葉で確認することが大切であると感じた。

授業の前半は、旋律の動きと歌詞の内容とを関わらせていたが、後半のペアの学習は強弱に焦点が当てられ、その土台となる旋律の動きと歌詞の内容との関連は、生徒の意識からやや薄れてしまったように感じた。そのためにも、生徒の発言を板書していくことが必要であったと考える。「Caro mio ben」の本来の旋律と斎藤教諭が生徒に示した旋律の違いなどについて、生徒が感じ取ったことを板書で整理していくことで学びの過程が視覚化され、本時の前半と後半の学習をつなぐものとなり、強弱の工夫を考える上での重要な根拠となると考える。

強弱の工夫を2パターン考える学習活動は、生徒にとって表現の可能性を広げるという点で非常に有効であった。生徒は、実際に歌いながら、まず自分の中で楽曲に最もふさわしいだろうという強弱の工夫を考える。その後、その工夫と逆の表現や全く異なる表現で歌ったり、それらを比べたりする中で、最初に考えた強弱の工夫によって、自分がイメージする「Caro mio ben」が表現できているか？について吟味する。他者の表現を聴いて自分の表現を追求するという学習でなくとも、自分の中に異なる考えを複数もつことで学びが深まるという、自己との対話的な学びである。強弱の工夫自体には唯一の正解はないため、このような活動を取り入れることで、旋律の動きや歌詞の内容をよりどころに音楽における表現の多様性に触れる学習となった。

最後に、強弱を工夫する場面で生徒から「教科書と同じになってしまう」あるいは「逆になってしまう」という発言があった場合、指導者としてどんな答えを返すかを参加頂いている先生方全員にお考え頂きたい。生徒が自分の判断に確信をもちたいが、それが出来かねている時、何をどのように伝えるのかは、これからの教師にとって非常に重要である。答えは一つではなく、それぞれの場面や生徒との関係性によって様々であり、多様な表現を認め合う音楽という芸術であるからこそ、その指導者として用意しておきたいことであると感じる。

(2) 群馬県高等学校教育研究会音楽部会副部会長

①上田 裕信 先生

発声練習の際の「喜怒哀楽」の表現の中で、「楽」の時に声を自然に出しやすいと感じている生徒が多い様子が見られ、普段から安心できる環境で授業を受けられているということが伝わった。自己表現のために人は想いを言語化するが、それでも感情を伝えることは難しい。しかしその感情は、音楽に乗せて歌唱することで他者に伝えられるということを実感できる授業であった。芸術科の授業の単位が少ないことが危惧されているが、芸術科、特に音楽の授業での可能性を今後も示してほしい。

②清田 和泉 先生

斎藤教諭と生徒との関係が大変良好で、とてもよい雰囲気の授業だった。生徒は笑顔で授業を受けており、本当に楽しんでいることが伝わった。

授業の中で「音が高くなるとテンションが上がる」や「音が低くなると悲しい感じになる」など、自然と音楽の知覚・感受と日常生活とを関わらせる言葉を生徒に投げかけていたことで、生徒のイメージする音楽の形と感情との関係がさらにインプットされると感じた。また、それに関連して思考・判断する場面が豊富でよかった。

本時はまだ4時間目ということで、実際の表現に結び付けるにはまだ早かった部分もあるが、これから思考・判断したことと表現とを一緒に深めていける指導を展開してもらいたい。

③大熊 信彦 先生

歌詞の内容、旋律の音のつながり(音高やリズム)、強弱を関連付けて、歌唱表現を工夫する授業だった。特に、旋律と強弱が生み出す音楽の質感に生徒自身が向き合うという点で、音楽の授業の本質を感じた。音楽が醸し出している質感に生徒を向かわせるための工夫が授業の中にたくさんあった。

次期学習指導要領では、「感性を働かせて、音楽を自己のイメージや感情と関わらせる」ことが強調されている。また、知識や技能を土台とした思考力・判断力・表現力を基に、音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きを感受しながら学びに向かう力を身に付けることが大事になる。音楽という教科の本質は、音楽が醸し出している質感の言語化を試みたり、友達と対話したりしながら、生徒が音楽の質的な世界を感じ取ることで心を豊かにしていくことである。そのことがよく行われている授業であった。

授業では、例えば、高い音に向かってクレッシェンドしていくのは歌いにくいですが、それでも、そのように表現したいという必要性を感じて技能を高める過程が大切である。クレッシェンドと書いてあるから次第に強くした、ということでは何も伝わらず何を表現したいのかも分からないが、「ここはどうしてもクレッシェンドしたいので、それができるような技能を身に付けて歌いたい」という思いをもって歌った歌は、聴き手にもその思いが伝わり、自分の音楽を表現した価値のあるものになる。本日の授業はそれを実現するという意味で、とても示唆に富むものであった。

(3) 清水 郁代 先生(群馬県高等学校教育研究会音楽部会長)

広い空間のあるよい環境の音楽室であるため、それを上手く活用することでさらに生徒の活動の幅も広がり、意見交流もより深いところまで触れられるものになったと感じた。生徒が楽しいと思っていたのは事実ではあるが、生徒の学びがどこにあったのかということも考えてほしい。

生徒は指導する先生をよく見ている。言葉遣いやイントネーション、表情まで一つ一つ注意をする必要がある。いつも笑顔で授業をするということは難しいが、音楽は「音が楽しい」と書くので、先生自身は個人的な感情は控え、生徒が先生を見た時に「頑張ろう」というエネルギーの源を与えられる存在であってほしい。

また、班別協議も活発であり、今回のように班別協議で出された意見を用紙にまとめて印刷し、直接目を通すことで、出席された先生方の貴重な財産になる。その他、学習指導案は生みの苦しみがあるが、今回のように左右見開きの2つを比較して、どのように変化しているのかをもう一度確認することで、作成の大変さも共有しながら先生方の今後の授業づくりに役立ててもらいたい。

音楽の教員は1校に1人であることが多く、自分で授業を振り返って課題を見つけたり客観的に捉えたりすることが難しい。そのため、こうした授業研究会にこれからも積極的に参加し、他の先生の授業を見させてもらう中で自分の反省点を見出してもらいたい。

5 閉会行事

(1) 挨拶

清水 郁代 先生（群馬県高等学校教育研究会音楽部会長）

授業研究会に出席された先生でなければ得られないものがある。それを大切にして、今後の授業改善に努めてもらいたい。

6 参加者（敬称略 順不同）

清水 郁代（吉井）	清田 和泉（吾妻特支）	上田 裕信（太田東）	大熊 信彦（太田女子）
島田 聡（高校教育課）	塚田 孔右（太田工業）	兒玉 理紗（高崎女子）	勝山 英城（万場）
住谷 伴（前橋商業）	東 喜峰（県立前橋）	川上 寛子（玉村）	黒岩 伸枝（高崎）
松平 康子（尾瀬）	富岡 恵美（安中総合）	五十嵐桃子（長野原）	橋詰 詩織（太田女子）
藤嶋 啓子（関学附）	須田 諭美（吉井）	戸松 久実（吉井）	野口 瑞穂（大間々）
秋元 麻美（渋川青翠）	車崎 優香（県立伊勢崎）	井上 春美（藤岡中央）	小川 唯佳（利根商業）
木部 誠（太田フレックス）	伴野 和章（太田東）	引田 麻里（市立太田）	角田 幸枝（榛名）
斎藤真里奈（沼田女子）	坂本 将（館林女子）		

文責：坂本 将（館林女子）

芸術科（音楽）学習指導案

群馬県立沼田女子高等学校

日時：平成30年6月22日（金）第5校時

クラス：1年1組（英数コース）女子30名

指導者：教諭 斎藤真里奈

授業場所：音楽室（東校舎4階）

1 題材名 イタリア歌曲の特性や旋律の美しさを感じ取り、歌唱表現を工夫して歌おう

(1) 教材 ・「Caro mio ben」（MOUSA1） p.18-19

・補助教材：ワークシート（指導者作成）

(2) 学習指導要領の内容における位置付け

本題材は、学習指導要領芸術科「音楽Ⅰ」の「A表現」より

(1) 歌唱

ア 曲想を歌詞の内容や楽曲の背景とかかわらせて感じ取り、イメージをもって歌うこと。

イ 曲種に応じた発声の特徴を生かし、表現を工夫して歌うこと。

エ 音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きを感受して歌うこと。

を指導するものである。

2 題材の目標

- (1) イタリア歌曲の発声の特徴と楽曲の背景とのかかわりに関心を持ち、楽曲にふさわしい歌唱表現を工夫して歌う。
- (2) 旋律の音のつながり方やリズム、強弱の働きを感受し、曲想を歌詞の内容や楽曲の背景と関わらせて感じ取り、イメージをもって歌う。

3 題材の考察

(1) 題材設定の理由

「歌う」という行為は、人間にとって最も身近な音楽活動のひとつである。そこには自らの身体のみで表現をするという楽しさと同時に難しさもあり、本校の生徒たちの多くは高い関心を示すとともに苦手意識をもつ生徒も少なからずいる。生徒たちは、高校入学までに、合唱を中心として大勢での歌唱活動に慣れ親しんできたと考えられるが、独唱表現はほとんど経験していないと考える。今回、本題材を通じて独唱による歌唱表現に挑戦することで、「歌う」という行為の奥深さにふれ、自らの思いや意図を自らの声で表現する力を身に付けられるようにしたい。

本題材で扱うイタリア歌曲は、音楽性の高い楽曲が多いだけでなく、声楽を専門的に学習する際の発声の基本を習得する教材として広く重視されている。また、イタリア語の発音は、ローマ字読みで読みやすく、響き作りやすいため、イタリア歌曲らしい発声や楽曲の理解と結び付けて表現しやすいと考える。歌詞の内容は恋愛に関するものが多く、生徒自身も自らの経験と照らし合わせたり、想像を豊かに膨らませたりして、歌詞と関連させた歌唱表現がしやすいと考える。また、旋律の動きも歌詞が表現する感情の起伏に沿っている楽曲が多く、曲想を旋律の音のつながり方やリズム、歌詞の内容を関わらせて感じ取り、歌唱表現を工夫する学習を行うために適していると考えられる。

(2) 生徒の実態

ア 音楽への関心・意欲・態度

授業に対する態度は真面目で落ち着いており、堅実に学習する姿勢が見られる。また本クラスは英数コースであり、「音楽Ⅰ」を履修しているクラスの中でも学習意欲の高い生徒が多い。歌唱表現に対しては特に興味関心が高い生徒が多く、ペアやグループでの活動では、自分の感じたことを伝えたり、周りの生徒の意見を取り入れたりする場面が見られる。

イ 音楽表現の創意工夫

中学校までの学習で、音楽を形づくっている要素を知覚し、その働きを感受して学習できている生徒は多い。また、生徒自らが気付いたことを歌唱に生かして表現を工夫する姿が見られる。しかし、歌唱表現を工夫する要素として強弱や速度などに限定されることが考えられるため、本題材で多角的に音楽表現を工夫し自らの表現意図に基づいて歌唱表現を工夫する力を身に付けさせたい。

ウ 音楽表現の技能

自らの表現意図に基づき歌唱表現しようとする意欲はあるが、姿勢や身体の使い方、呼吸法、共鳴の様子などと結び付かない生徒もおり、各時間の導入時に体ほぐし、ハミング、声の方向をイメージさせる練習などを行っているものの、特に声量や音程には課題がある。また、旋律や歌詞を歌唱表現に関連付けることに慣れていないようである。その他、読譜についても個人差があるため、少人数グループでの活動などを通して、生徒が相互に学び合う場を設定し、理解を深められるようにして、表現意図に基づいた歌唱ができるようにしたい。

(3) 教材選択の理由

「Caro mio ben」は、イタリア歌曲を学習する上で初期の段階で取り組むことの多い楽曲である。それは初学者にとって発声の特徴を捉えやすいだけでなく、旋律の進行やリズムが平易であり、歌詞に表される主人公の心情も生徒にとって理解しやすく、音楽表現の技能を身に付けたり、創意工夫にもつなげたりしやすいからであると考え。イタリア歌曲の学習を通して自らの音楽表現の可能性を広げ、多様な音楽文化を理解し、更なる「学びに向かう力・人間性」を育むことにつなげたい。

また、本教材の学習を通じて、イタリア歌曲のおおらかな雰囲気、高度な音楽性、旋律と歌詞の内容の関連性について理解する意義は大きいと考える。音楽を形づくっている要素のそれぞれの働きに注目し歌唱表現につなげることで、自己のイメージや感情、音楽の文化的背景などと関連付け、楽曲のよさや特徴を感じ取り、表現意図をもって工夫して歌唱できるようにしたい。

(4) 題材の系統性

「音楽Ⅰ」ではこれまでに、「愛校心や本校の生徒としての自覚や誇りをもち、校歌を歌おう」という題材において、日本語の歌詞における発声の基礎的な技能を習得し、楽曲に適した発声法で、楽曲の曲想と歌詞の内容とを関わらせながら歌唱する学習を行った。

本題材では、習得した基礎的な発声法をイタリア歌曲で活用・発展させていく。また、イタリア語の美しい語感やイタリア歌曲の恋愛観は生徒の知的好奇心を喚起させる。イタリア歌曲を通して、多角的に歌唱表現を深められるようにしたい。

今後の題材ではドイツ歌曲を扱い、イタリア歌曲との共通性やそれぞれの固有性に理解を深めながら、更に幅広く歌唱表現を追究できるようにする予定である。

また、9月に行われるコーラスコンクールに向けて、音楽の授業で学んだ知識や技能、主体的に取り組む態度を、授業を越えて学校生活の中でも生かしていけることを期待したい。

4 題材の評価規準

音楽への関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能
<p>①イタリアの文化やイタリア語、発声法に関心をもち、イメージをもって歌う学習に主体的に取り組もうとしている。</p> <p>②歌詞の内容や楽曲の背景に関心をもち、それらを生かして歌う学習に主体的に取り組もうとしている。</p>	<p>①旋律やリズムなどの音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気などを感受しながらイタリア歌曲の雰囲気、イタリア語の特徴を捉え、どのように歌うかについて表現意図をもっている。</p> <p>②旋律やリズムなどの音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気などを感受しながら歌詞の内容や楽曲の背景を理解し、それらを曲想とかかわらせて感じ取り、どのように歌うかについて表現意図をもっている。</p>	<p>①曲種に応じた発声の特徴を生かした音楽表現をするために必要な歌唱の技能を身に付け、創造的に表している。</p> <p>②曲想を歌詞の内容や楽曲の背景と関わらせて感じ取り、イタリア歌曲の特徴を生かした音楽表現をするために必要な歌唱の技能を身に付け、創造的に表している。</p>

5 指導と評価の計画 (全6時間)

時	○学習のねらい ・ 生徒の学習活動	評価規準 【評価方法】
1	<p>「Caro mio ben」を発音や音程に注意しながら歌唱し、今後の学習への見通しをもつ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「Caro mio ben」の旋律の音のつながり方を確認しながら、旋律の美しさを感じ取って歌唱する。 ・旋律の音程を歌唱する技能を習得してから、原語で歌唱する。 ・イタリア語の発音を理解し、旋律とのかかわりを意識しながら歌唱表現をする。 	<p>関-① 【観察】</p>
2	<p>「Caro mio ben」の曲想や雰囲気を感じ取り、楽曲にふさわしい発声やイタリア語らしい発音を身に付けて歌唱する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「Caro mio ben」の歌詞の内容を確認しながら、楽曲の雰囲気を感じ取って歌唱する。 ・イタリアについて興味のある事柄を調べて共有し、芸術が盛んである国であることを理解する。 ・異なる言語による歌曲と比較し、より楽曲にふさわしい発声や発音について考えて歌唱する。 	<p>関-②【観察】</p> <p>創-① 【観察・ワークシート】</p>
3	<p>「Caro mio ben」の歌詞について理解を深め、豊かな歌唱表現を考えて歌唱する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・歌詞の内容を、語り手の感情を手掛かりに考える。 ・歌詞の意味と関連づけながら、楽曲のよさや旋律などの特徴を感じ取り、歌唱表現に生かす。 ・強弱や速度などの楽譜からの情報を正しく読み取り、歌唱表現に生かして歌う。 	<p>創-② 【観察・ワークシート】</p> <p>技-② 【観察・ワークシート】</p>

4 本 時	歌詞の内容と旋律の特徴を関連付け、表現を工夫して歌唱する。	
	・ペアで歌詞の内容と旋律の音のつながり方やリズムに着目し、関連性を話し合う。 ・ペアで発表したり、お互いの歌唱表現について助言をしたりし、より豊かな歌唱表現を考え、歌唱する。	創-②【ワークシート】 関-②【観察】
5	これまでの学習内容を踏まえ、表現意図をもとに歌唱する。	
	・前時までの学習内容を生かし、全員の前で歌唱する。 ・観客を意識した演奏を考え、歌唱表現する。	技-①②【実技】
6	イタリア歌曲のまとめをし、今後の学習へ生かす。	
	・前時の発表を通して、学習の振り返りと課題の見直しをする。 ・イタリア歌曲の表現を、次回の題材である合唱に生かす方法を考える。	関-①【ワークシート】

6 指導方針

イタリア歌曲全体への関心を高めるため、イタリアの文化や歴史などにも触れながら、イタリア歌曲への興味が深められるよう指導する。また、イタリア歌曲の音楽的特徴を理解し、歌唱表現の工夫を行えるようにするために、音楽を形づくっている要素のうち特に旋律の音のつながり方やリズムと、イタリア語の発音との関連性について指導する。

そして、歌唱表現の工夫をより深めていくために、生徒同士が意見交換を行う学習や歌唱を相互に聴き合う学習を取り入れながら生徒の表現意欲や読譜力を高めていく。ただし、歌唱の技能のみに傾倒するのではなく、表現意図をもった歌唱の工夫をしようとしている生徒を評価できるようにするため、ワークシートの記入の様子や話し合いなどの学習活動の様子をよく観察し、評価に生かせるようにする。

7 本時の学習

(1) 本時の目標

歌詞の内容が表す感情と旋律の音のつながり方とを関連付け、表現を工夫して歌唱しよう。

(2) 本時の学習（本時は7時間扱いの5時間目）

時 間	○学習のねらい ・生徒の学習活動	・教師の働きかけ及び指導上の留意点 ◆学習活動における具体的評価規準【評価方法】 ◎Aと判断する場合のキーワード △Cと判断される生徒への支援・働きかけ
導 入 10 分	○前時までの復習をし、学習課題を確認する。 ・体ほぐしと発声をする。 ・「Caro mio ben」を歌唱する。	・体ほぐしをすることにより、より良い発声ができるような体の状態に整える。 ・発声練習をすることで、正しい声の出し方や正しい姿勢を意識できるようにする。 ・前時までの学習内容を踏まえ、歌唱ができるようにする。

<p>展 開 35 分</p>	<p>○「Caro mio ben」の中間部分を取り上げ 歌詞の内容と旋律の動きの関連性について、ペアで探る。</p> <p>・旋律の動きが持つ音楽的な特徴を「Caro mio ben」から抜粋しながら確認する。</p>	<p>・音のつながり方やリズムを変えた旋律を、教師が歌唱したり、生徒が歌唱したりすることで、本来の旋律がもつ特徴を感じられるようにする。</p>
	<p>旋律の動きと歌詞が表す感情との関連を生かして歌唱表現を工夫しよう。</p> <p>・歌詞や旋律に着目しながら、歌唱表現を工夫する。</p>	<p>・歌詞の内容と旋律の音のつながり方が深く関連していることを歌唱表現に生かすよう促す。</p> <p>・実際に歌い試しながら歌唱表現を工夫する。</p> <p>・いくつか異なる表現方法を工夫することで、楽曲によりふさわしい表現を探るよう促す。</p> <p>・意見交換する際に、相手に工夫した点とその根拠を説明させることで、聴く視点を明確化する。</p> <p>◆創 - ②【ワークシート】</p> <p>◎歌詞の内容と旋律の関連性を、リズムや強弱などの具体的な音楽を形づくっている要素と結び付けながら見つけ、表現意図をもっている。</p> <p>△どの表現が適切か判断しかねている生徒には、言葉かけを行い考えがまとめられるようにする。</p>
	<p>・工夫した箇所を発表し合い、お互いの歌唱表現について意見交換や助言をする。</p> <p>・いくつかのペアが発表し、歌唱表現の工夫についてクラス全体で共有する。</p>	<p>・助言を付箋に記入させ、お互いに学習内容を意識できるようにする。</p> <p>・歌詞の内容と旋律のつながりが深く関連していることに気づき、それを歌唱表現に生かせるようにする。</p> <p>◆関 - ②【観察】</p> <p>◎歌詞の内容と旋律とを関連付けることに関心を持ち、積極的に歌唱している。</p> <p>△歌唱表現の工夫がしやすい箇所を抜き出し、表現意図をもって歌唱できるようにする。</p> <p>・異なる表現の工夫により、楽曲の雰囲気に変化することに留意させる。</p>
<p>ま と め 5 分</p>	<p>○次時の学習課題を考えて全体で歌唱する。</p> <p>・本時の振り返りをし、次時への見通しを立てる。</p> <p>・本時で整理したことを生かしながら歌唱する。</p>	<p>・次時では観客を意識した演奏を考え、歌唱表現することを伝える。</p> <p>・歌唱表現の深まりを実感できるように言葉かけを行い、歌唱する。</p>